

## 地縁・血縁関係からみた離島におけるホスピス型地域の生活実態

# THE ACTUAL LIFE CONDITIONS IN THE COMMUNITY OF THE HOSPICE TYPE IN THE REMOTE ISLAND OBSERVED BY THE RELATIONSHIP BETWEEN THE BLOOD TIES AND TERRITORIAL CONNECTION

建築計画分野 清かおり

少子高齢化や過疎化が進む離島の集落では行政が積極的に行なっている人口を増やすといった量的な地域づくりでは限界がある。量的な解決や集落の完全撤退ではなく縮減していく生活環境に合わせて助け合うことで個を尊重した豊かな生活を成り立たせているホスピス型地域が存在している。そうした地域の個人生活を支える地縁・血縁関係やそれらの支援の成立要因を明らかにし、ホスピス型地域の今後の可能性を探る。

**There is a limit by the quantitative community improvement to increase the population that the government performs positively at the village of the remote island which low birthrate and aging and the depopulation go ahead through. Community of the hospice letting the rich life that respected a unit consist by helping each other to living environment reducing not the complete evacuation of the quantitative solution and village exists. I clarify shared territorial bonding, an establishment factor of relationship and that support-to-support private life of such a community and investigate future possibility of the community of the hospice.**

### 1. はじめに

#### 1-1. 背景と目的

1960年代の高度成長期をきっかけに都市化が進み、離島や山間部の過疎化への影響が注目されている。日本全体でみると1955年から2010年に全国の人口が約4割増加しているのに比べ離島の人口は5割以上減少している。(国土交通省 離島振興課 「離島の現状」 H24年10月) 離島は他の過疎地域よりも深刻な過疎問題を抱えている。縮減していく社会状況に合わせ、地方自治体が都市部の住民の移住を促進する施策が多くとられている。また、一方で集落全体を撤退させるという対策も考えられている。離島や過疎地域などの縮減社会では今後の集落の在り方を考えなければならない状況である。

このような状況で移住による人口を増やして地域を再生するのか集落の撤退かではなく、縮減化した生活に寄り添って必要なものを補い合い維持させることで豊かな生活が行えているのではないだろうか。本研究では、縮減に合わせて生活の質的向上を行なっているホスピス型地域の住民の生活実態からその特性や可能性を探っていくことを目的とする。

#### 1-2. 定義

地域が縮減する中で、人口の増加等を目指す量的

な地域づくりではなく、公的な支援のみならず脱制度的な活動や自然発生的な付き合いを通して住民の生活を尊重しながら生活を保持している質的地域づくりを行っている地域を「ホスピス型地域」と定義する。

#### 1-3. 研究の位置づけ

縮減していく地域での地域活性化や撤退での地域づくりではなく、ホスピス型地域の集落4事例を対象に住民の生活実態からホスピス型地域の成立要因を論じる。

#### 1-4. 調査方法

本研究では、対象地の住民に対してヒアリング調査を行った。項目は対象地の生活での日常生活の過ごし方や地縁や血縁での支え合いの仕組みが与える影響など個人生活で支え合いが与える影響を聞き取るものである。本研究では、少子高齢化が進む離島を人口や独自の文化と伝統行事などの集落特性から以下の対象集落を選定した。

表1 対象地概要

島	集落	人口	世帯数	自治組織	購買環境	集落行事
加計呂麻島	於齊	48	32	区長	移動販売(月、水、土) 集落内商店(仁科商店)	新年会、船こぎ大会、豊年祭兼敬老会、忘年会、ゲートボール大会
	花富	59	41	区長	移動販売(月、水、土) 集落内商店(泰村商店)	新年会、浜下り、夏祭り、8月踊り 豊年祭兼敬老会、忘年会、月1青年会
	実久	27	16	区長	移動販売(月、水、土) 集落内商店(浜商店)	新年会、豊年祭兼敬老会、忘年会
請島	池地	59	38	区長、青年団 婦人会	移動販売(毎日)	新年会、豊年祭兼敬老会、忘年会、ゲートボール大会

## 2. 日常生活と外部空間

### 2-1. 日常生活

農作業など海や畑で過ごす時間が午前中の涼しい時間帯や夕方の涼しい時間帯には必ず1日のうち2時間以上ある。また、午前中や夕方に30分から1時間の散歩を行なっている。農作業や散歩などを行なっている人の中で最も長い人で8時間、最も短い人で30分を外部空間で過ごしていることが分かる。また、自宅内や外部空間で他者と過ごす時間が1日の中に1回以上ある人が大半である。最も長い人で11時間少なくとも最も短い人で5分程度を他者と過ごしている。自宅では昼寝やテレビ、手芸や音楽を聞くといった趣味を行なっている。1人で寂しく過ごすことはなく、個人の好きなことを好きな時間に行き過ごしている。

### 2-2. 外部空間の役割

①畑・海 畑や海は野菜を育てることや海での収穫や散歩など個人の好きなことをして楽しむ場や生きがいの場となっている[1][2][3]。また、互いの好きなことを1人ではなく共同での畑で野菜を育ててお菓子づくりを楽しむなど誰かと共有して楽しんでいる。畑や海は労働や個人の好きなことを楽しむ場だけではなく他者との交流の場となっている。

②共同の涼み場 気温が高くなる時間帯には海風が当たる大樹の下にある涼み場に涼むために自然と人が集って来る[4][5]。集って来る人や通る人とおしゃべりして楽しんで過ごしている。共同の涼み場は涼むだけの場やおしゃべりをする場だけではなく寂しさの解消の場となっている(図2、3)。

③個人の涼み場 自宅付近に個人の涼み場を作っている人はそこで昼寝や新聞や本を読んで過ごしている[6]。自宅の中ではなく外部空間で生活行為を行うことで集落の人が過ごしていることを見かけるになるので間接的にだれかと繋がることになる。また、前を通る人とおしゃべりや友人が来て一緒にお酒を飲むなど誰かと楽しむ行為が生まれている[7]。個人の涼み場は涼むだけの場や生活行為を行う場だけでなく、他者との繋がる場となっている(図2、3)。

④みち みちで歩行中に会うと会話や挨拶などの他者との関わりを生んでいる[8][9]。茶飲みやおしゃべりを行なわない人ともこうした場で関わりを持っている。みちから家の中にいる人に対して話かけることもある[10]。みちはただの交通の場であるが、歩くことが人とのつながりを生む場となっている。

### 2-3. 1日の生活

①Nuさん 畑と涼み場以外の外出はあまりないが外部空間での滞在時間が比較的長く、他者との繋がり場として涼み場を活用している(図4)。

②Mkさん 農作業を目と足が悪くなったため起こっていないため普段の外出はあまりない。だが、毎日2時間は集落の住民が涼み場に来るのでおしゃべ

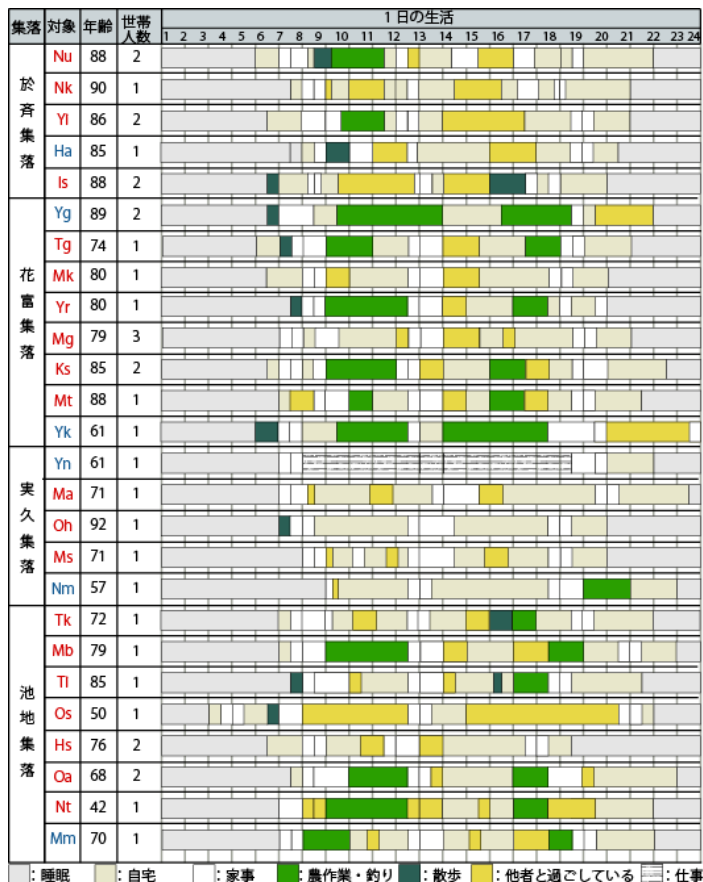


図1 対象者の概要と生活パターン



図2 於育集落 涼み場 位置図

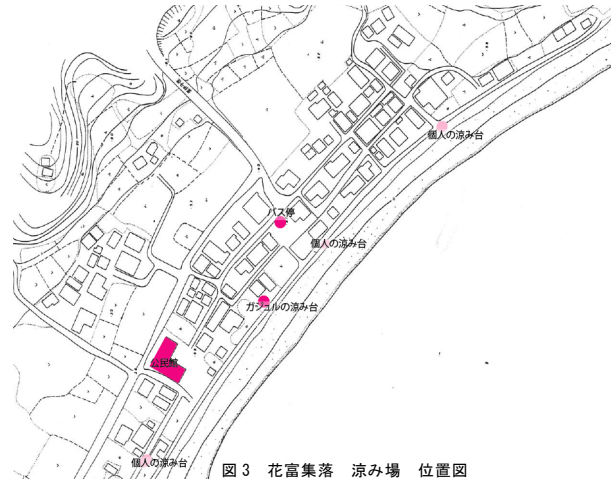


図3 花富集落 涼み場 位置図

りをするために涼み場で過ごしている。涼み場が他者との繋がり拠点となっている（図5）。

③0sさん 精神障がいのため生活のリズムが崩れており、早朝に海岸へ散歩に行っている。日中は病気の症状で1人過ごす時間に耐えられないこととたまり場がないことで1人暮らしの高齢者の家を回っておしゃべりをしている。外部空間で過ごす時間は散歩と歩行のときのみで他者と過ごす時間が1日の大半を占めている（図6）。

### 3. 他者との繋がりが生む思いやり

#### 3-1. 血縁からの思いやり

①非同居：遠隔による思いやり 仕送りや食材や菓子類などの物的支援で生活の基盤を支えることに役立っている[11]。また、事前に分かる病気ならば相談しており、子どもも即座に対応している。

②非同居：近居（島内-奄美本島内）による思いやり 食材や菓子類の仕送りや日帰りでの支援など気軽に会えるといった心理的な支援が多く、金銭的な支援は少ない[12]。また、体調に異変を感じたときも翌日

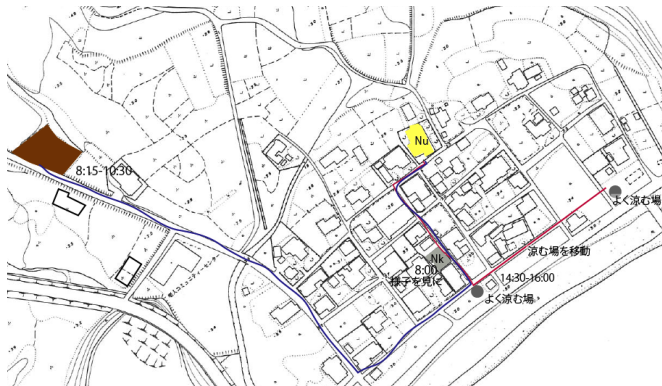


図4 Nu 行動パターン



図5 Mk 行動パターン

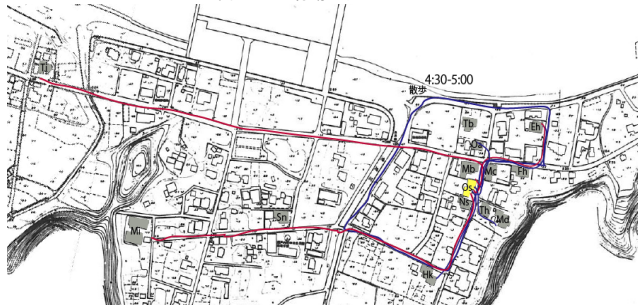


図6 0s 行動パターン

には対応している。

③非同居：帰省による思いやり 親が家事や日常生活を行えなくなった場合に、帰省し長期滞在をして家事を負担することで生活を支えている。親が呼び戻すというよりは、電話での近況報告や帰省したときに親の生活に不安を感じたことがきっかけとなっている[13]。期間は限定的であるが生活に密着した支援を行なっている。

④同居：Uターンによる思いやり 親が家事や自立した日常生活を行えなくなった場合に、子どもがUターンして同居し、家事を負担することで生活を支えている[14]。子どもがいる安心感や身体的にも負担なく住み慣れた環境で住み続けることが可能になっている。

⑤同居：同居による思いやり 毎日そばにいるという安心感と力仕事を行ってくれるということから心理的な支援と生活費の負担など金銭的な支援が多い。母親が毎日家事を行ってくれるため同居している子どもは家事の負担は考えなくてすむが、休日などには掃除を代わりに行って母親の負担を軽減している[15]。

⑥親戚（2等親以上）による思いやり 同集落内から行われ、支援内容は病気や高齢の1人暮らしをしている人におかずのお裾分けや見守りや緊急時の対応が中心となっている[16]。血縁よりかは地縁に近い感覚となり、日頃からおしゃべりや呑み会などを一緒に過ごすことでより生活状態が把握が容易なため個人にあった支援が行なえている。

#### 3-2. 血縁からの思いやりと地域要素

①先祖崇拝 先祖崇拝とは亡くなった先祖が子孫の生活に影響をもたらしているという思想観である。先祖崇拝による思想観が未だ残っている[17][18]。

②親元制度 親元制度が現在も色濃く残っていることで、お盆や正月などの先祖元参りによって血縁者が誰なのかを把握している[19]。

表2 ヒアリング

外部空間：畑・海
[1]Mk: よもぎをね、みんな畑が荒れてますから生えないうです。畑に植えて肥料入れて草取りしたりして、よもぎ刈れるときは刈って来たら洗う人は洗って葉をちぎる人はちぎってここで裏で共同作業。
[2]Oa: 海入るときはね昼間となりのおばさんとかね。隣の従兄弟のことね一緒に行ったり。昼間は1人で行くことの方が多いですね。
[3]Oa: それ(畑を)楽しみながらね。家庭菜園ぐらいの。よくテレビで人生の楽園って番組観るたびに私もそうかなって。そういうことも楽しみながらしてるかなって思います。
外部空間：共同の涼み場
[4]Mg: (お気に入り)は) 海岸とこ。昼ご飯食べてから休憩、涼みに行くの。夕方まで涼み場所だね。(集落の人が) 集るから。
[5]Mk: その付近(家付近)は友達もねいないちよ、やっぱり、涼み場ばあ一あてにしてそこに…タオルケット持ってきてね、昼寝したり
外部空間：個人の涼み場
[6]Ha: 毎日。そこにもう寝台つけてそこで新聞見てね。その倉庫の横に寝台つけておって新聞を読むの、毎日隅から隅まで全部読む。
[7]Yg: 家のそう。涼み台よね、作ってあるからそれに座っておてね。向こうには行かない。自分のでいつちていね(座つてると) やると自然にね人はこっちに集ってくる。
外部空間：みち
[8]Nu: 畑に行くとかね、誰かれ会うね。大体、畑でおるときに会って古に屋いってこうね、畑いってこうねち(言って)行くから。(大体みんな生活は) もうおんなしだもん、行くところもね。
[9]Yg: Ykさん、Tgさんが海岸(護岸のみち)に来てね、あれするから三人くらい会う。話す。10分以内や。
[10]Mk: Mtさんとか、家が近いから。ずっと見えますよ、家が近いから。だから、寂しくないです

### 3-3. 血縁からの思いやりの要因

地域的要素の存在も影響していると考えられるが、要因はその他に存在していると考えられる。子ども達自身も家庭なども落ち着いたところに、実家での生活にやりがいや楽しみを感じたことで帰省による思いやりが成立しているのではないかとと言える[20]。Uターンでは子ども達が定年後など第2の人生を考え始めた時に田舎での生活を思い描いていたからこそ決断ができ、現在も住み続ける要因となっていると考えられる[21]。親戚の思いやりも制度による血縁者の把握も前提にあるが、人口が少なくなり血縁者も減りつつある中で頻りに接している人を遠い血縁でも近い親戚と感じている[22]。閉ざされた環境でどこかで血は繋がっているという根底の意識が血縁意識の拡大の要因となっていると考えられる。

### 3-4. 血縁からの思いやりと生活

①Isさん 子どものUターンでの家事の補助や親戚の思いやりがIsさんの生活を支えている(図7)。

②Ygさん 近居や帰省による思いやりや親戚による思いやりで生活を支え楽しんでいる(図8)。

### 3-5. 地縁からの思いやり

①状態把握 習慣が行っていない場合、近隣などが気付き見守りが行なわれている。また、日常的に挨拶や会話を行なうことでその住民の状態把握に繋がっている。

②助け合い 体調が悪いときや忙しいときにお裾分けをして家事の負担を減らしてくれる。畑をやっていない人へは野菜を収穫するとお裾分けして食材を提供している。足が不自由な人がいると買い物を自分のものと一緒にやってくれるなど必要としていることを補い個人の生活に安心感を与えている[23]。

表3 ヒアリング

血縁：遠隔による思いやり
[11]Oh: 服なんかは内地の子もなんかから来る。島で買ったことない。みんな送られて来る。おかずが来る。食料も三重の方が来るからね。月2回来る。
血縁：近居による思いやり
[12]I: もちろん、息子が古仁屋にすんでおるんだけどあやっば古仁屋を中心としてね。1週間に1回はねもう日曜日は休みだからやあ。日曜日には必ず様子見に帰ってくる。
血縁：帰省による思いやり
[13]Ygの娘: 私は大阪に住んでるんですけど、母ちゃんかね、ちょっと転んで足が悪くなったからね。ちょっと帰って来てね、父ちゃんも歳で耳も遠いしね。旦那さんなんかかねいいから。家事ほっぽらかして来てるんですよ。
血縁からの支援：Uターンによる支援
[14]Is: 洗濯物も入れることは出来るけど干すのは出来ないで息子が干したり入れたりしてご飯のお米とだり家の掃除したりやってくれてるから。
血縁：同居による思いやり
[15]Nu: 掃除は自分で。たまに(息子が)してくれるよ。休みのときなんか。高校行ってる子が1週間に1回帰ってくるからね、休みの日に。あの子と2人で。
血縁：親戚による思いやり
[16]Yg: 子どもが古仁屋だけでなく名瀬にもおりますから子どもに連絡とってあげてね。家族が来るまでご飯つくって食べさせたりねしてやってる。親戚の方が、親戚のね。
血縁と地域的要素：先祖崇拜
[17]Yk: こっちはね、親を大切にしようというてあるあれやからね
[18]Ng: 仕事と親を天秤かけたらこっち(親)の方が重かったんですよ
血縁と地域的要素：親元制度
[19]Yg: 大体ねこちらが先祖元なるからね。こちらのじいちゃん達が7名兄弟でそれぞれや嫁に行ったり嫁さんもらったりしてとの繋がりでね。もうお盆なる時にはもうここを中心にな。
血縁：成立要因
[20]I: 遠い親戚。近い親戚でも近くせん人もいるがね。遠くても本当に親戚みたいにしてて兄弟みたいない人もいるし、従兄弟なってるちょっと遠い二兄弟ぐらいの人もいる。こんな小さい島だからそうしてるだろうって思うと、親戚が。
[21]Yk: じいさん、ばあさんみんな年寄りなってるもてな。むこうでは、かなり体がガタがきつたからね。田舎来たらもうのびのびと生活しとるから7キロまた太ってるもてな。
[22]Tg: 若い人なんかがお好み焼きやるうかついうたら親みてるのばっかりおるからやっぱ親ばかり見ても退屈でそんなにして遊びに来ててもいいついたらじゃ今日はなに焼く肉して食べるかお好み焼きして食べるかつまたこの前もして食べた。

③楽しみの共有 1人では楽しめないことを集落の人と一緒にやることで楽しんでいる。おしゃべりや料理を作って分け合うこと、お菓子づくりなどの料理が好き人は誰かにお裾分けして感想を貰って楽しんでいる[24]。食事づくりの負担の軽減や食材提供、寂しさの解消にも繋がっている。

④食事の負担軽減 飲食店もないので誰かの家や涼み場で集って食事会をしている。1人に負担がかからないように各々飲み物や食べ物を持ち寄って行われ、賑やかに過ごしている[25]。調理の負担が軽減され楽しみにも繋がっている。

⑤自治的要素 自治組織がないため緊急時の対応や集落行事のときに高齢者を補助するなど70歳以下の男性などが行っている。生活上困ったことを区長が配布に来るときに相談し対処している[26]。

### 3-6. 地縁からの思いやりの地域的要素

①ユイバレ 農業が主体産業であった時代に産業基盤の共同体のユイバレをつくり隣近所で助け合って広大な植え付けや出荷作業を行っていた。ユイバレは農業の衰退で現在は存在しない[27]。

②溜まる風習 茶飲みとは女性が近隣の家に集り雑

【関係図】

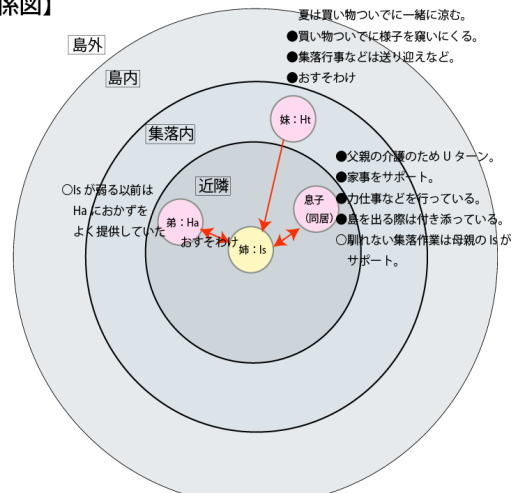


図7 Isの血縁との繋がりに

【関係図】

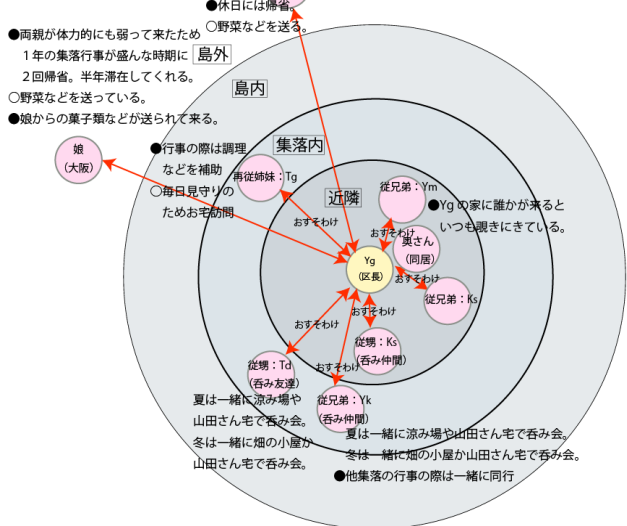


図8 Ygの血縁との繋がりに

談を行うことで今でも女性の間で継続されている。夏季の暑い時間帯に高齢者がガジュマルの樹の下で涼をとっては雑談を行う涼みも継続されている。

③住宅プラン 加計呂麻島では分棟形式が伝統的な住宅プランとなっている。オモテ空間は冠婚葬祭など非日常の空間である。ネーショはオモテと続きで設けられており就寝の空間、トウグラは炊事場と団らんの日常の空間である。ナカヤはトウグラに続いて設けられた団らんなどの日常の空間である。現在は棟と棟の隙間を増築している。増築した後も室の使われ方の用途は棟の用途から変化はしていないことからナカヤとトウグラが住人の居場所となる。居場所が把握しやすく、みちから家の人が居るか居ないかという状況が把握出来る。居場所にいないと家の中まで確認に行くなどの見守りを行なっている。トウグラがみちに面している場合は住民側が通行人に声をかけおしゃべりをしている。床高が高いため家の中から塀の向こうが見え、みちに通る住民に声がかかりやすくなっている。住民同士の交流は玄関から家の中に入ってではなく日常生活を送る場で家の床高を利用して外と内で行われている(図9)。

### 3-7. 地縁からの思いやりと要因

地域的要素の中で住宅プランが地縁からの思いやりを促進している面は大きい。また、産業がなくなり年金暮らしが多いことで住民の生活状況が把握出来やすくなっている。また、時間的にもゆとりが生まれ自身の楽しみに費やす時間が結果的に他者との時間も増えている。生活状況の把握や時間にゆとりある生活が地縁からの思いやりの要因となっていると考えられる。

### 3-8. 地縁からの思いやりと生活

①Maさん おしゃべりや食事会で寂しさの解消を行なっており、自身も住民の生活を支えていた。Iターンと建築問題で揉め事が起こってしまった。地縁の思いやりで生活に楽しみや安心を与えていたが、揉め事の心労から集落を離れることになった(図10)。

④Nsさん 精神障がい療養で帰省しているため不安定なときは付き添って支えてくれる。地縁の思いやりが病気の症状に寄り添い助けてくれることで生活に安心感が生まれている(図11)。

## 4. 集落での繋がりの特徴と成立要因

### 4-1. 集落内の繋がりの特徴

①於斉集落 集落内のNkさん、Isさんが主に繋がりを中心になっている。この2人が主に集落の中で繋がりを繋げている存在となっている。また、区長は家を1軒1軒回って自治的連絡をしているため個々との繋がりがある(図12)。

表4 ヒアリング

<p>地縁からの思いやり：助け合い</p> <p>[23]MbMcさんが作ったおかずを持って来てくれたりね。私がどこか畑行ったりしたら帰って来たらそこに置かれてあったりね。みんな助け合いですよ。田舎だからね。</p> <p>地縁からの支援：楽しみの共有</p> <p>[24]Mc: 畑に植えて肥料入れて草取りしたりして、よもぎ刈れるときは刈って来たら洗う人は洗って葉をちぎる人はちぎってここで裏で共同作業。</p> <p>地縁からの思いやり：食事の負担軽減</p> <p>[25]Yk: 5時から12時までは飲み会と。自分で飲むのは持ち寄って。ほとんどうちの同年輩はもう、この護岸で集ってたりして。帰ってきてから(家は)宴会場。悪い場合に地縁からの支援：自治的要素</p> <p>[26]Yg: 税金おさめてくれとかやあ、それから老人の方の健康手帳のねやって今はね防災あのあれが煙が出たらピーって鳴るね。その家庭のね設置したり。それから、水が出なかったら水が出ないね。水道の関係で。ガスはねつかないとか。電話でかかってくるから。地縁からの支援と地域的要素：ユイバシ</p> <p>[27]Na: その頃はユイバシとかユイバシって隣近所で全部でしよったからほら。今はそれだけ畑やってる人がいないからやらなくなったね。助け合ってね。</p>
---

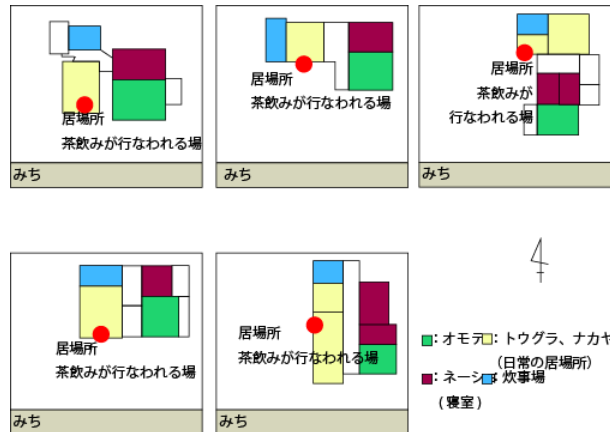


図9 増築後の住居平面ダイアグラム

(参照：加治福樹、畑聡一、小野利明「奄美・花富の住居形態の変化に関する考察-南西諸島の空間構成に関する研究 その2-」)

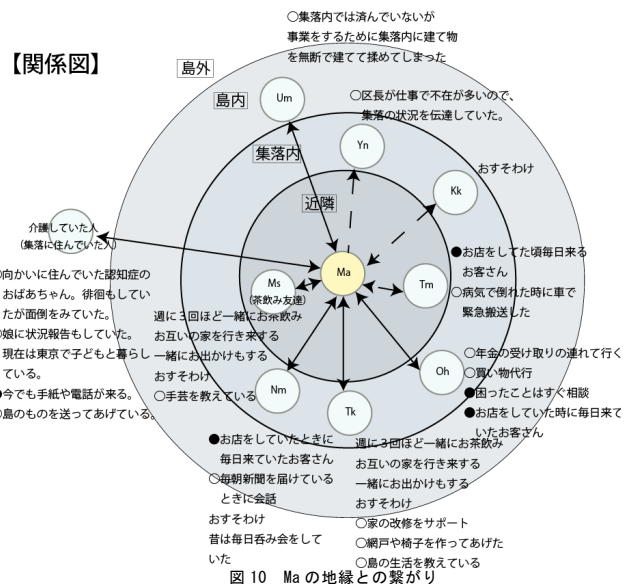


図10 Maの地縁との繋がり

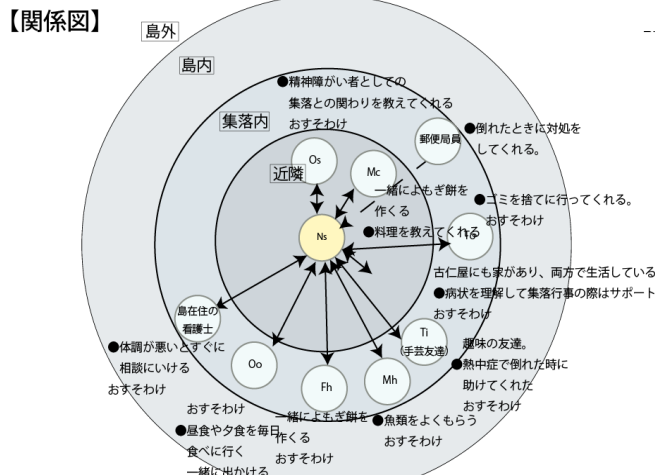


図11 Ntの地縁との繋がり

②**花富集落** 集落内の繋がりで個人との繋がりが互いに重なり合っている。それらの中核となっているのは区長である Yg さんである。また、区長は1人暮らしの高齢者の見回りや区長の代理で青年達が各家を回って自治的連絡をしているため個々との繋がりがあがる(図12)。

③**実久集落** 繋がりが Ma さんに偏っていることがわかる。Ma さんが今は繋いでいるが、I ターン者との揉め事があり引き上げてしまうので繋がりの希薄化が危惧される。また、区長は各家を回って自治的連絡をしているため個々との繋がりがあがるが自治的繋がりに以外の繋がりを持っていない(図12)。

④**池地集落** 自宅近隣に繋がりが部分的に固まって存在している。Os さんが部分で固まっているのを繋いでいる。また、区長は各家を回って自治的連絡をしているため個々との繋がりがあがるが自治的繋がりに以外の繋がりは近隣のみとなっている(図12)。

#### 4-2. 繋がりの特性と成立要因

①**分散的ネットワーク** 個人の繋がりが集落内で分散され、それぞれの繋がりで思いやりが生まれている。繋がりが分散されているがその中でも複数の人と繋がっている中心となる人物が存在している。中心となる人物同士での繋がりが重なって集落内で繋がっている。集落自治の中心となる区長が集落全体と繋がっていることで情報共有を行え、集落全体の結束も強まり支援の幅を広げている(図13)。

②**部分的ネットワーク** 個人の繋がりが近隣に固まり、近隣での繋がりで支援を行われている。部分的に固まった繋がりが集落内に点在している。部分的に固まっていること集落内全体に繋がりを持つ人物が各グループの情報を伝達している。集落内の問題に対しては集落自治の中心となる区長又は集落全体と繋がっている人が情報伝達することで情報共有が可能となり、集落全体を把握している。近隣の結束も強まり支援の幅を広げているが、集落全体での個人に対する支援はそれほど多くない(図13)。

③**集中的ネットワーク** 個人の繋がりが集落内で分散されているが複数の人と繋がっている中心となる

人物が1人だけとなっている。1人に対する負担が大きく、中心となる人物がいなくなってしまうと集落内の繋がりが希薄化される。集落内の問題に対しては中心となる人物と集落自治の中心となる区長との関係が重要となっており、情報共有が行えることが出来ると集落全体による思いやりに繋げることが出来る(図13)。

#### 5. まとめ

以上のように、ホスピス型地域では個を尊重した生活が行なわれている。そうした生活には血縁による子ども達の親への心配や自身の生活状況の変化や血縁意識の拡大から生まれる物的支援や身体的、心理的支援と地縁による時間的ゆとりや生活環境の類似から生まれる生活状況の把握から生まれる状態把握や状態に合わせた助け合いがなされていることが重要である。また、地域の内的な要因で支えられているホスピス型地域が個を尊重した生活環境を維持しながら今後持続して行くには行政単位での地域の量的視点からの評価ではなく、質的評価への転換が必要であると言える。

#### 参考文献

- 1) 平岡翔太「縮減か化社会におけるホスピス型地域づくりに関する研究-山村過疎集落を対象として-」2012年 大阪市立大学修士論文
- 2) 奥本裕美子「過疎地域におけるホスピス型地域づくりに関する研究」2013年 大阪市立大学修士論文
- 3) 加治福樹、畑聡一、小野利明「奄美・花富の住居形態の変化に関する考察-南西諸島の空間構成に関する研究その1-」1991年5月 日本建築学会学術講演梗概集
- 4) 加治福樹、畑聡一、小野利明「奄美・花富の住居形態の変化に関する考察-南西諸島の空間構成に関する研究その2-」1991年5月 日本建築学会学術講演梗概集

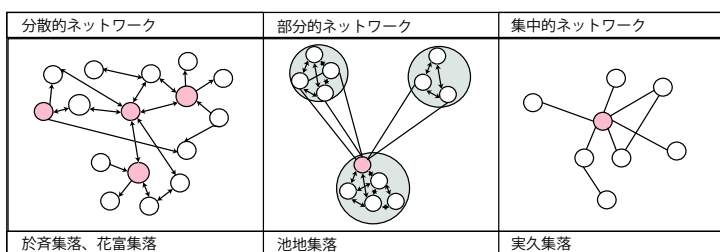


図13 繋がりのタイプ

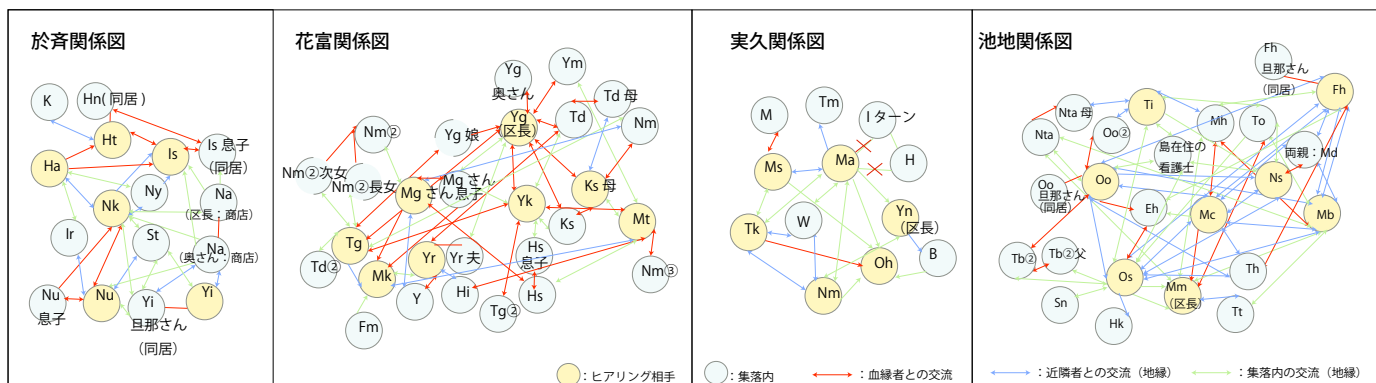


図12 各集落内の繋がりが